

# 東京オリンピック・パラリンピック等の成功に向けて



河合純一

かわい じゅんいち  
パラリンピック5大会水泳メダリスト  
日本パラリンピアンズ協会会長



室伏広治

むろふし こうじ  
アテネオリンピックハンマー投げ金メダリスト  
東京オリンピック・パラリンピック競技大会  
組織委員会スポーツ局長(兼スポーツディレクター)



高橋尚子

たかはし なおこ  
シドニーオリンピックマラソン金メダリスト  
東京オリンピック・パラリンピック競技大会  
組織委員会アスリート委員長



長榮周作

ながえ しゅうさく  
審議会副議長／オリンピック・  
パラリンピック等推進委員長  
パナソニック会長



豊田章男

とよだ あきお  
オリンピック・パラリンピック等推進委員長  
トヨタ自動車社長



〈司会〉  
久保田政一  
くぼた まさかず  
事務総長

## リオデジャネイロ大会を振り返って

久保田 まず、先般のリオデジャネイロ大会を振り返ってみたいと思います。オリンピックでは、日本が過去最多となる41個のメダルを獲得、続くパラリンピックでも日本選手が大いに活躍し、2020年東京大会への弾みがつきました。また、大会の運営面などにおいても、リオでの経験やノウハウは、東京大会の成功につながるうえで重要です。最初に、リオ・オリンピックの開会式に出席された豊田委員長から、リオで感じたこと、そして2020年に向けて参考にすべきこと

経団連では、オリンピック・パラリンピック等推進委員会を設置し、全国各地のアスリート・スポーツ関係者の支援、企業によるアスリート雇用の機会拡大などを通じて若いアスリートたちのがんばりを引き出すなど、東京大会の成功に向けて協力している。また、経団連と他の経済団体などで構成するオリンピック・パラリンピック等経済界協議会においても、2020年を契機として、スポーツ・健康、社会のバリアフリー化、地方創生や技術立国・日本の発信など幅広い分野で、大会のレガシー(遺産)づくりに取り組んでいる。本座談会では、東京オリンピック・パラリンピックの開催成功に向けた展望や課題について、大会組織委員会、アスリート、経済界それぞれの視点から議論する。



オリンピック閉会式に出席した長榮委員長

提供：パナソニック

ンドン大会を上回りました。しかし、金メダル数がゼロという結果だったのは、豊田委員長がおっしゃったように、世界のパラリンピックの競技レベルがものすごいスピードで向上しているのに対して、日本は追いついていないからでしょう。私たち企業としても、いろいろなかたちで支援していく必要があるのではないのでしょうか。

当社は1988年のカルガリーオリンピック

クの際に、ワールドワイド公式パートナーとなり、2014年からはパラリンピックのワールドワイド公式パートナーとなっています。今回のリオ大会では、開会式や閉会式の演出で使用する映像音響機器やプロジェクションマッピング技術に加え、各競技会場に設置されるLED大型映像装置などを提供しました。オリンピックパークのパブリックビューイング会場には、多くの人が集まって試合を観戦していました。また、メディア関係者が集結する国際放送センターには350インチの大画面映像装置があり、私も水泳を観戦したのですが、プールサイドで見る以上に臨場感がありました。加えて、いま誰が一番で泳いでいるのか、どのようなタイムなのか画面で確認できるので、応援にも熱が入ります。東京にはオリンピックパーク自体がありませんし、各競技の会場がそれぞれ広範囲に点在します。競技場に入れない人たちのためにも、できるだけ多くのパブリックビューイング会場を設置するとともに、熱中症対策としてクールスポットなどを設けることが必要でしょう。日本のテクノロジーを活用するチャンスですし、工夫次第で大会は一層盛り上がるのではないのでしょうか。

久保田 室伏広治さんは、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のスポーツディレクターとして、オリンピック、パラリンピックの両方を視察されましたが、いかがでしたでしょうか。

**スポーツプレゼンテーションの重要性を感じた**

室伏 今回は、組織委員会のメンバーとして参加しましたが、選手村に滞在することも多くありましたので、選手村と競技エリアについてお話ししたいと思います。報道されたとおり、選手村では、シャワー、トイレ、食事など、さまざまな問題がありました。それにもかかわらず、最終的には成功だった、うまくいったと評価され、トーマス・バッハIOC(国際オリンピック委員会)会長は「マーベラスな大会だった」とおっしゃいました。この「マーベラス」には、いろいろな意味があったのではないのでしょうか。

「成功」といわれる理由の1つとして、選手たちが良い成績を残せたということがあります。その背景には、選手たちがベストの状態に競技できる態勢があったと思います。競技エリアに問題があれば、アスリートは、大会

などをお話いただけますか。

## リオの「感動」を東京で

豊田 オリンピックを生で観戦したのは、今回のリオ大会が初めてでした。私自身、ホッケーの日本代表選手としてアジア大会に参加した経験はありますが、スケールの違いをあらためて実感しました。

感想を一言でいえば「感動」です。開会式の感動が日増しに大きくなっていったのは、日本選手の活躍があったからです。結果もさることながら、試合後の選手たちのコメントで、応援してくれる誰かのためにがんばったという言葉を聞いたたびに、ますます応援したくなりました。以前、室伏さんが、「東日本大震災の前後で日本選手のコメントが、『自分のため』から『誰かのために』へと変わった」とおっしゃっていましたが、私も、そう感じました。

その後、開催されたパラリンピックは、これまで以上にメディアが取り上げたこともあり、日本でも大いに盛り上がりました。メディアが、パラリンピアンをオリンピックと同じく「アスリート」戦う集団」として報じていた



「スポーツの現場訪問企画」で石巻市の子どもたちと交流

ことが印象的でした。これはまさに私自身も感じてきたことであり、とてもうれしく感じています。金メダルの獲得数が残念な結果となった背景には、障がい者スポーツをめぐる他国の成長スピードが日本以上に早くなっていることがあります。2020年に向けた課題が見えたと思います。

また、ブラジル国民全体が歓迎ムードで盛り上がりつつあり、その活気のなか、滞在中は気持ちよく過ごすことができました。東京大会では、オリンピック関係者はもちろん、すべて



「スポーツの現場訪問企画」で仙台大学で練習する加藤由希子選手(SMBC日興証券)と

提供：トヨタ自動車

の国民が、世界各国の選手や観客をどのように迎えるかが、成功を左右すると感じました。久保田 次に、オリンピックの閉会式に出席された長榮委員長に伺いたいと思います。

## パブリックビューイングで大会を盛り上げる

長榮 リオ・オリンピックでの、日本選手団の金メダル数は過去最多には届かなかったものの、総メダル数は過去最多を記録しました。パラリンピックでも、総メダル数は前回のロ



さまざまな問題が指摘されながらも、リオ大会が結果的に成功したのは、競技エリアの運営がうまくいったことが大きい。東京大会でも同様の準備・取り組みが必要になるだろう。日本選手の競技力向上については、技術とともにタフな精神を身につけさせることが重要である。国際大会では、危機をチャンスに変える力、困難を楽しむ力がなければ、ベストのパフォーマンスを発揮できない。2020年の東京大会の成功に向け、オリンピックとパラリンピアンが共同して取り組み、次世代に精神面のレガシーを残したい。

(室伏広治)

渋滞が多くかなり苦労しました。東京大会には、オリンピックパークがなく、各競技場が点在するため、多くの場合、移動は一般道を使うことになり、やはり渋滞が心配されます。また、報道関係者に配布される取材許可証の数が限られているので、1人の記者が複数の競技場を回ることになります。選手だけでなく、報道陣もかなりの人数になりますので、

が成功したとは評価しませんから、そこはしっかりしていったと思います。国際競技団体と組織委員会が連携して、「選手が最高のステージで競技できるようにする」という目標を共有していたからこそ、うまくいったのではないのでしょうか。東京大会でも、同様の準備・取り組みが必要になってくると思います。

また、先ほど長榮委員長が指摘されました

リオ大会の開会式に出席し、スポーツの力、素晴らしさをあらためて感じた。東京大会の成功には日本人選手の活躍が不可欠であり、企業は継続的にスポーツ支援を行っていかねばならない。当社も、「ステークホルダーへの恩返し」という位置付けで、さまざまなスポーツ支援活動に取り組んでいる。パラリンピックに関しては、東京は世界で初めて2回目の開催をする都市となる。このことの意味は大きく、「心のバリアフリー」の実現を目指すとともに、日本の技術力を活かしたハード面のレガシーづくりにもチャレンジしたい。

(豊田章男)



が、私は東京大会のスポーツプレゼンテーションの担当なので、やはりパブリックビューイングはとても重要だと思いました。リオ大会では、観戦という点では一部の競技場に十分な点がありました。例えば、マウンテンバイクは7kmの距離を走行します。そのため、せっかく会場にいても、スクリーンの数が十分でないため、観客には何が起きているかわからない時間が生まれます。もちろん、チケットホルダーを楽しませるプレゼンテーションやイベントなど、リオ大会でもさまざまな工夫がされていましたが、東京大会では、もっといろいろなことができると考えています。現地で見ている人も含めて、世界中の人に競技の面白さ、東京の良さを伝えられるために、どのような工夫が必要か、真剣に考えなければいけないと感じながら、リオ大会を観戦していました。

久保田 続いて、テレビのキャスターとしてオリンピック取材、報道された高橋尚子さんに伺いたいと思います。

### 報道の立場から見た大会運営の課題

高橋 まず、オリンピックで過去最多のメダ

彼らがスムーズに移動できるような配慮も必要です。現地では、報道関係者が入場に1時間以上並ぶ様子や、観客が入場手続きで手間取って試合開始に間に合わず怒っている姿を見かけました。駅から会場までの所要時間だけでなく、入場ゲートでの待ち時間を表示するようなシステムも必要だと思います。

他にも細かい部分で気づいたことはたくさんあり、それらはすべて東京大会の課題となるので、その意味では非常に多くのことをリオ大会から学ばせてもらいました。

久保田 最後に、パラリンピックの聖火ランナーを務められ、大会開催中にはIPC(国際パラリンピック委員会)の殿堂入りを果たされた河合純一さんよりお願いいたします。

### リオで学んだことを選手・スタッフと共有して前に進む

河合 私はパラリンピックに選手として6回出場していますが、今回はこれまでとは異なる立場から、大会を経験することができました。まず、聖火ランナーは、とても良い経験でした。例えば、聖火ランナーの打ち合わせは、学校の教室で子どもたちの休み時間に行っていたのですが、とても上手な活用方法だと感じし

ル獲得という結果に、大変喜んでいきます。2014年に東京開催が決まりましたが、この間の2年の伸びが非常に大きかったと、現場にいて思いました。選手たちから聞いた話からは、「東京につなげたい」という気持ちを強く感じました。

今回、報道という立場で現地に赴きましたので、大会を俯瞰することができました。良かった点、残念だった点それぞれについて、1つずつ申しあげたいと思います。

まず良かった点は、大会関係者、ボランティア、さらには地域の人たちから、「大会を成功させたい」という思いが伝わってきたことです。ボランティアのサポートは細やかでしたし、地域の人たちも温かく、親切でした。ボランティアの育成、地元住民による盛り上げは、選手や観客にダイレクトに伝わる部分なので、東京大会でも不可欠なことだとあらためて思いました。

残念だった点は、移動の問題です。室伏さんが、競技エリアの運営の素晴らしさを挙げていたとおり、ほとんどの競技がオリンピックパーク内で行われるので、そこでの移動は非常にスムーズで、ストレスフリーだったと思います。しかし、一歩外に出たときの移動は、

ました。また、沿道からたくさんの人たちから声援をいただき、気持ち良く走ることができました。

私は競技からは引退しましたが、今回のIPC殿堂入りを含め、今後もパラリンピックにかかわれることは、何よりもうれしく感じています。今後、オリンピック・パラリンピックは、平昌、東京、北京と、アジアでの開催が続きます。競技でも、大会運営でも、日本がアジアをけん引していかなければいけないという思いを強くしました。

リオ大会には、JSC(日本スポーツ振興センター)の연구원として赴き、また日本チームのハイパフォーマンスサポート・センターの運営責任者を任されていました。多くの選手やスタッフにセンターを活用してもらい、それなりの成果を挙げることができました。その一方で、金メダルがゼロという結果については、大きな宿題をもらったととらえています。

皆さんがおっしゃるように、各国のレベルが日本を上回るスピードで上がってきています。本場に必死になって練習しています。日本では、さまざまなテクノロジーを活用して選手の能力向上を図ろうという取り組みに注



リオ大会のパラリンピックは、残念ながら金メダルゼロという結果に終わった。各国が日本を上回るスピードでレベルを上げてきている。選手的环境は良くなりつつあるが、選手を支えるコーチやガイドランナーといった人たちへのサポートが、日本ではまだ十分とはいえない。オリンピックとパラリンピックの間にある「壁」を取り払い、オリンピックの経験者・指導者が、パラリンピアンへの指導にあたる環境を整えることが必要である。また、パラスポーツの楽しさを市民に体験してもらう取り組みを進めていく。  
(河合純一)

海外に行くと、気軽にスポーツを楽しめる場所が街中にたくさんあることに気づきます。めぐる環境が必要です。例えば、スポーツジムをもっと朝早くから夜遅くまで使えるようにする、体育館などの学校施設を個人が借りられるようにする、施設のバリアフリー化を進める、といったことはすぐにでもできるのではないのでしょうか。

目が集まります。それも大事ですが、そのベイスとなる練習量や練習環境の整備が、まだまだ追いついていないと感じます。また、コーチやガイドランナーなど選手を支える人たちへのサポートも十分とはいえません。いろいろと課題はありますが、東京大会に向けて若い選手の活躍が多く見られたことは

東京大会ではオリンピックパークがなく、試合会場が点在するため、できるだけ多くのパブリックビューイング会場を設置し、大会を盛り上げる必要がある。また、幼少期から続けている剣道を通じて、障がいを持った剣士と接する機会があり、さまざまな気づきを得た。パラリンピック成功のためには、障がい者アスリートと市民が触れ合う機会をつくり、心のバリアを少しずつなくしていきたい。2020年までは、日本の素晴らしさ、魅力を世界にアピールする好機。東京オリンピック・パラリンピック開催後も、海外からのお客様を引きつけ続ける日本にしていきたい。  
(長榮周作)



## 2020年東京大会に向けた競技力向上とスポーツ支援

ひとつの希望でした。私がリオで学んだこと、感じたことを、選手やスタッフとしっかり共有して、前に進んでいきたいと思っています。

久保田 東京大会を盛り上げ、成功に導くためには、日本代表選手やチームの活躍が不可欠です。JOC(日本オリンピック委員会)は、「金メダル20〜30個(世界第3位)を獲得する」「総メダル数では世界第5位の成績を収める」「全競技で入賞(8位以内)する」といった目標を掲げています。これを達成するために、どのように競技力の向上を図っていくべきでしょうか。まず、金メダリスト、そして大会組織委員会のアスリート委員長も務められる高橋さんに伺います。

### スポーツの「場」づくりが必要

高橋 アスリートの立場からすると、経団連にも協力いただいているJOCの「アスナビ」<sup>(注)</sup>は、非常に良い結果が出ている取り組み

日本でも、もっとスポーツと社会の距離が近づいてほしいと思います。例えば、子どもに人気の「キッズニア」というテーマパークがあります。このスポーツ版があれば、子どもたちがスポーツに興味を持ってくれますし、競技の底上げにもつながります。

アスリートにとっては、皆さんに関心を持ってもらうこと、応援してもらうことが、最高のモチベーションになります。それにはまず、スポーツと社会の距離を近づけることが不可欠です。大会後のオリンピック関連施設の一般開放なども、そうした観点から考えていく必要があります。

久保田 同じく金メダリストで、先般、大会組織委員会のスポーツ局長にも就任された室伏さんよりお願いいたします。

### 国際大会で必要な「タフさ」を身につける

室伏 競技力向上のためには、河合さんがかわられたハイパフォーマンスサポート・センターのような設備、高橋さんが指摘された競技・練習する場所づくり、どちらも必要な支援だと思います。

他方、リオ大会で競技を見ていて感じたこ

の1つだと思っています。ただ、人気スポーツ以外では、オリンピックを狙える位置にいる選手でも、就職が困難で、競技を続けられないという現状があります。また、地方でもアスナビのような取り組みは、大変ありがたいと思います。

練習環境についても、河合さんがおっしゃったように、諸外国と比較して恵まれているわけではありません。課題は多くありますが、根本的な問題として、日本ではアスリートの社会的な位置付けが低いと感じています。アスリートが市民と触れ合う場をもっと設け、交流を深めていく。そのことによって、市民はスポーツに興味を持つようになり、アスリートは応援することでモチベーションを高める。そういった好循環をつくっていくなかで、アスリートを取り巻く環境も変わっていくと思います。

現在、アスリート委員会では、2020年までにどんなアクションをして、何を残したかという議論をしており、もっとスポーツの「場」をつくりたい、つくってもらいたい、という意見が多く出ています。アスリートが練習する場所・施設を増やすことはもちろんですが、さらに市民が自由にスポーツを楽しむ

とは、活躍した選手は皆、一言でいうと「タフ」な選手だったということです。日本選手も、さまざまな問題に直面しても、それを乗り越えていけるたくましさをも身につける必要があります。

国際大会では、多くの日本選手にとって、まず、言葉の壁という問題があり、コミュニケーションが苦手な人は、それがストレスになってしまいます。次に食事の問題もあります。豊田委員長は、選手村のメニューを全部召し上がったそうですが、選手たちもびっくりしたと思います。ほかにも、例えばバスが時間どおりに来なかったなど、小さな問題がすべてストレスになってしまい、結局、ベストのパフォーマンスが発揮できなかったという選手も多いのではないのでしょうか。競技力があっても、日ごろ過保護に扱われていると、精神的にもろくなり、それが競技に出てしまうのです。

たとえ自国開催の大会であっても、オリンピックほど大規模になると、予想しなかった問題が必ず起こります。危機や困難をどうやって工夫して乗り越えるか、実は、これもスポーツの楽しみなのです。結果を残すことに集中するあまり、楽しむことができない選手

(注)アスナビ(アスリートナビゲーションシステム)：トップアスリートと企業をマッチングし、Win-Winの関係を構築するために、JOCが2010年から実施。詳細は、<http://www.joc.or.jp/about/athnavi/>参照

## 人材育成の観点から 継続的なスポーツ支援を

長榮 河合さんがおっしゃった、オリンピックとパラリンピックの壁を取り払うこと、特に人々の意識のなかのバリアフリー化は、私も大切だと思っています。

私は、小学校4年生の時に剣道を始めて、今でも続けています。幼いころに通っていた道場には、足の不自由な上級生がいましたし、社会人になってからは、片腕の剣士とも出会

ロールモデルを日本からつくり出すことで、オリンピックとパラリンピックの間に無意識に存在する「壁」を取り払うことができると思っています。そうした選手を発掘・育成することも課題の1つです。

障がいに関して、社会面、ハード面のバリアが問題とされていますが、一番大きなバリアは、人々の意識のなかにあります。それを顕在化させて、心のなかを変えていかなければいけません。2020年は、そういう意味でも千載一遇のチャンスになります。

久保田 企業スポーツに取り組まれる会社のトップであり、ご自身も剣道七段でいらっしゃる長榮委員長にお伺いします。

リオ大会で過去最多のメダルを獲得できたのは、選手たちに「東京につなげたい」という気持ちが出てきたことが大きいと感じた。アスリートにとっては、国民からの応援が最高のモチベーションとなる。アスリート委員会として、もっとスポーツと社会の距離が近づくような取り組みを進め、東京大会の好成績につなげたい。同時に、オリンピックとパラリンピックの間にある「壁」を乗り越えて一緒に活動していくことにより、2020年の先にある「共生社会」の実現を目指したい。

(高橋尚子)



## オリンピックとパラリンピックの 「壁」を壊したい

河合 私も、オリンピックで勝ち抜くためには、室伏さんがおっしゃった「タフさ」が必要であると痛感しました。

競泳大国であるオーストラリアの有名なオリンピックコーチに、直接話を伺う機会がありました。彼は「オリンピックで勝ちたいなら、毎朝10kmジョギングさせなさい」と言っていました。私が「泳ぐのではなく、走ることの意味があるのか」と質問したところ、「オリンピックではたくさん歩くからだ」という答えが返ってきました。選手村では、離れた食堂まで歩く。試合に行く時はバス停まで歩き、到着後は会場内を歩くというように、普段よりもたくさん歩くことになるので、それを日常当たり前のことにしておくこと、つまり、「水泳だけ速くても勝てない」という指導なのです。

こうした指導をしていないところに、日本の「甘さ」があります。大会に出場した選手やスタッフの経験を活かして、勝つための条件をたたき込んでいくことに、これから取り組まなければいけません。オリンピックには、

いました。一緒に稽古をするなかで、2人とも健常者に勝るとも劣らない実力を持っていたことが印象に残っています。健常者と障がい者が一緒にできるスポーツがある。そこにはさまざまな新しい気づきがあるのです。

また、リオ大会の期間中に、当社ショールームに車いすバスケットボールの体験コーナーを設置しました。多くの一般の方々にもお越しいただき、体験いただいたのですが、私も挑戦したところ腕の力が足りず、ゴールにボールが全く届きません。そこに車いすバスケットボールの選手だったIPCのクレイヴァン会長がいらっしゃいました。華麗なドリブルの後、ポーンと1発でシュートを決めて見せたことに感動を覚えました。

豊田委員長が、いろいろなスポーツの現場訪問を続けていますが、ぜひ私も取り組みたいと考えています。リオ大会で銀メダルを獲得したボッチャのチームと当社野球部との交流や、シッティングバレーとバレーボールチームとの交流などを検討しています。このような交流を通して、当社の選手たちも新しい気づきや刺激を受けるでしょう。それが、オリンピックとパラリンピックの交流につながり、さらには、お互いの競技力向上につなが

そうした経験値が相当蓄積されていると思いますので、今後の展開としては、オリンピックの経験者・指導者が、パラリンピアンに指導にあたれる環境を整えることが必要になってきます。

結果を出している国では、オリンピックのメダリストが、パラリンピックの指導者を経て、オリンピックの指導者になるといったパスウェイも形成されています。種目によっては、オリンピックのメダリストに近い記録がパラリンピックで出ています。これまでのように、「パラリンピックはパラリンピックの指導者で」という発想で勝ち上がれる状況にはありません。オリンピックで活躍した選手・指導者が、パラリンピックに携わり、結果を出す。そして、それがオリンピックの側からも評価されるような仕組みづくりが必要です。

実は、パラリンピアンとして才能を有する者は、インターハイの選手や甲子園球児のなかにも潜在しています。軽度の障がいゆえに、「パラリンピックとは関係ない」と思い込んでいるケースが少なくないのです。海外には、オリンピックとパラリンピックの両方に出場している選手もいます。私は、両方を目指す

ると期待しています。

企業のスポーツ支援という点では、当社は企業スポーツとして、バレーボール、野球、ラグビーのチームを持っています。スポーツを人材育成の一環としてとらえ、企業は業績にかかわらず継続的にスポーツを支援していくべきです。まずは、業績悪化で廃部や休部といった事態にしないよう、経営をしていくことはもちろんですが、今後もしっかりと支援をしていきたいと思っています。



IPCのクレイヴァン会長とあいさつする長榮委員長

提供：パナソニック



義足歩行を体験する豊田委員長  
（村上加選手〈長谷川体育施設〉と）

「育」として展開されており、学校で学んだこと、気づいたことを、実際に見に行つて、体験する。2020年の本番前に、ぜひ、そういう経験ができる機会をつくっていただきたいと思っています。招待選手が参加するハイレベルな国際大会を、テストイベントの意味も含めて、開催できればと思っています。

一方で、私たち大人がバラスポーツを体験する方法として、お酒を飲みながらボッチャなどを楽しめる「ボッチャバー」をつくってはどうか。ダーツバーがはやるくらいですから、絶対に盛り上がると思います。ブラックライトを当てると光るボールをついたり、ちょっとオシャレな趣向を凝らした

## 「心のバリアフリー」を 東京大会のレガシーに

室伏 ボッチャバー、すごく良いアイデアですね。私も「アスリートカフェ」など、アスリートと市民が触れ合う場があるとよいと思っています。豊田委員長が挙げられたように、企業においても、アスリートと社員が触れ合う機会をつくれれば、会

社は元気になると思います。地域との交流など、オリンピック・パラリンピアンが市民と接する機会を多くつくるのが、2020年に向けた大きな課題の1つでしょう。

そうした活動をオリンピック・パラリンピアンが一緒にやってやるのが大切です。そのためには、河合さんのように世界で活躍するパラリンピアンが、社会に出ていって、私たちにアドバイスをしてくれるようにしなければなりません。私は、2016年大会の招致活動の際、コペンハーゲンでのIOC総会に出席し、一緒にプレゼンテーションをするなど、パラリンピアンと初めて共同作業を行いました。この経験があれば、障がい者とのように接したらよいのか、今でもわからなかったでしょう。直接触れ合うことで初めて、その人の気持ちや、社会で置かれている立場を想像することができるようではないでしょうか。障がい者と市民が共同作業する機会をつくっていくことで、「心のバリアフリー」が東京大会のレガシーとして残ることを期待しています。まずは、ボッチャバーの実現からですね。河合 ぜひ室伏さんに店長をやっていたきたい。オリ・パラ一体ということなので、私が副店長をやりますので。ただ、お酒を飲み

久保田 豊田委員長は、やはり企業スポーツにご熱心で、ご自身も大学時代にホッケー、また現在もカーレースに取り組んでいらっしゃると思いますが、選手強化という観点ではいかがでしょうか。

豊田 室伏さん、河合さんがおっしゃった「過保護にするな」「タフになれ」ということ、本当に素晴らしいと思います。ピンチをチャンスに変える胆力を養うこと、それがスポーツの醍醐味です。そのために企業として何ができるかを考えていきたいと思っています。

長榮委員長がおっしゃるとおり、企業は、経営状況が悪くなると、運動部を廃部にすることもあります。私が社長に就任したところ、リーマンショックや品質問題などあり、当社の経営は非常に苦しいものでした。私から、「運動部は継続する」と明言したことはありません。ただ、よく運動部の応援に行きました。選手たちが私に元気を与えてくれるからです。逆境に立ち向かうエネルギーを注入してくれました。

「業績が悪いから廃部にせよ」という意見が社内から出てこないような「軸」が必要だと思います。長榮委員長が指摘された人材育成もその1つでしょう。私は、社員には「ステ

ークホルダーへの恩返し」だと説明しています。当社がオリンピック・パラリンピックへの支援を決定した時も、費用対効果の話が出てきましたが、私は、そういう問題ではないと思っています。

高橋さんがおっしゃった、アスリートと市民の距離を近づけること、これも非常に素晴らしいと思います。当社の運動部の選手は、例えば、入社式、販売店との会合の場など、さまざまな行事に出席します。販売店や仕入れ先が集まる大会議の場で、パラリンピアンとともに、車いすバスケットボール体験を担当してもらうこともあります。また、土日の応援を通じて社員と運動部選手の距離が縮まり、職場に一体感が出ます。応援することで社員は元気をもらい、社員と選手の間に好循環が生まれるはずで

こうした活動を続けていくことで、スポーツの理解者・応援者が増えていくと信じています。経済界の支援という点、お金を出す、施設をつくるといったことになりがちですが、地道な活動を継続していくことも大切です。今日、皆さんのお話を伺って、さらに自信を深めたので、もっとアクセルを踏んでみようと思っています。

河合 ポイントは2つあると思います。1つは、日本選手の活躍が応援のモチベーションになるため、選手の強化が重要だということです。もう1つ、多くの人たち、特に未来を担う子どもたちに、世界の選手たちのハイパフォーマンスに触れてもらうためには、教育が重要であると思います。

すでに「オリンピック・パラリンピック教

## 「ボッチャバー」で盛り上がる

久保田 東京パラリンピックは、1964年に続いて、夏季大会では世界初となる同一都市2回目の開催であり、「すべての競技会場を満員にする」などの目標が掲げられています。この機会に、障がい者スポーツに対する国民の理解や関心を一層高めていくために必要なこと、また、障がい者アスリートとそれを支える方々が抱える課題について、河合さんよりお願いいたします。

## 東京パラリンピックの 成功と真のバリアフリー 社会に向けて

違うことができなかったこと、選手村中央に設置されていた橋の勾配が急で、車いすの方が自力で渡れなかったことなどです。私も選手村を見学させてもらったのですが、健常者にはこうしたことになかなか気づくことができません。障がい者の立場になって考え、障がい者の目線で見ることが大切なのだとあらためて感じました。

今、2020年の東京大会で、当社の技術を使ってどんなことができるかを考えています。例えば、ホテルから競技場へ移動する道順のバリアフリー状況について、光ID技術でスマートフォンに母国語で情報を提供するサービスを開発しています。また、ハードのバリアフリーとともに、皆さんが挙げられた「心のバリアフリー」も非常に大切だと思います。現在、当社では「ビュティフルジャパン」という活動を展開しています。これは、2020年をゴールに全国47都道府県を訪問し、東京オリンピック・パラリンピックを目指すアスリートたちと一緒に、挑戦することの大切さや夢を追うことの素晴らしさとともに、この国の美しさを再発見していくという活動です。

先日、この活動に参加してくれた車いすテ



パラリンピック出場を目指す障がい者アスリートの社員と  
提供：パナソニック

ニスの選手と話をしたのですが、普段は義足で生活をしているため、試合では車いすの操作が課題となっていることや、車いすの人にあいさつをする際、健常者が気を使ってしゃがむ必要がないことなど、いろいろなことを教えてくれました。彼との対話を通して、私も新たな気づきを得ました。こうした活動を通じて、東京大会までにより多くの方々の心

### 「共生社会」 パラリンピックの先にある

高橋 河合さんがおっしゃるように、オリンピックとパラリンピックのスポーツの間には壁があると、私も感じています。今こそ、その壁を越えて、お互いに協力する時だと思っています。オリンピックとパラリンピックが一緒に活動することで、お互いにさまざまな気づきを得られると思いますし、お互いのファンを取り込むこともできます。

例えば、「東京マラソンEXPO」には10万人以上の人々が訪れます。そこにパラスポーツを体験できるコーナーをつくり、パラリンピックに実演してもらうというのも、1つのアイデアです。長榮委員長がクレイヴァン会長のシユートに感動されたように、パラスポーツの面白さに気づき、マラソンとパラスポーツ両方のファンになるかもしれません。

また、1年間に全国各地で開催されるマラソン大会は、3000以上あるといわれています。そこで地元のオリンピックとパラリン

ながらのハンマー投げは危険ですね。

久保田 企業、経済界としては何に力を入れていくべきでしょうか。豊田委員長に伺います。

「FUN TO DRIVE」は  
健常者だけのものではない

豊田 ボッチャバーのご提案、私も大賛成です。ぜひお客として行きたいですね。

バリアフリーに関して、私がよく社員にす



義肢づくりの現場訪問(鉄道弘済会義肢装具  
サポートセンターにて)

提供：トヨタ自動車

る話があります。当社がパラリンピックのポンサーになった時、あるパラリンピアンから、こう言われました。

「私は今まで自動車を憎んでいました。交通事故によって脚を奪われたからです。しかし、今回、トヨタがパラリンピックのスポンサーになってくれたことで、私の未来を奪ったのが自動車なら、未来をつくるのも自動車だと考えるようになりました」

大変重みのある、胸に迫る言葉でした。当社は、オリンピック、パラリンピック、スペシャルオリンピックの支援をしています。そのパラリンピアンという言葉から、私は「オリンピック、パラリンピック、スペシャルオリンピック」に何の違いもない。多様性を大切にしながら一緒に未来をつくっていく。その一点で、どれも同じ取り組みなのだ」と考えるようになりました。

先日、河合さんから、2020年の東京は、世界で初めてパラリンピックを複数回開催する都市になると伺いました。この意味は大きいと思います。先頭を切って2周目を走るわけですから、2020年には、その先のパラリンピック開催都市に対して、指針となるものを残さなければならぬと考えています。

当社の取り組みの1つに、車の自動運転の実現があります。トヨタはすべての人に「FUN TO DRIVE」をお届けしたいと考えており、自動運転の実現に向け、今取り組みを進めているのです。

例えば、2020年東京大会で、空港から選手村まで自動運転でスムーズに到着できるシステムをつくれなかと考えています。もちろん、一般車両と混在しないよう道路を整備するなど、自動車メーカーだけでは解決できない課題もあります。しかし、2020年までにどこまで近づけるか、チャレンジしてみたいと思います。あと4年というのは、納期としてはちょうどよい期間ですし、大会をショーケースとして世界へ発信するチャンスです。

久保田 先ほども少し触れていただきましたが、長榮委員長、いかがでしょうか。

### アスリートと市民が触れ合う 「ビュティフルジャパン」

長榮 先日、マラソンのガイドランナーとしてリオ大会に参加した社員が帰国後に、リオ大会のバリアフリーをめぐる問題点をいくつか報告してくれました。例えば、選手村のスロープには手すりがなく、幅も狭いためすれ

のバリアを少しずつなくしていきたいと思っています。

久保田 最後に高橋さんからお願います。



撮影：工藤裕文

ピアンが走るのもよいと思います。地元のアスリートが立ち上がることで、地域の人たちのオリンピック・パラリンピックに対するモチベーションも上がっていくでしょう。マラソンだけでなく、競泳の会場やバスケットボールの会場でも、オリンピックとパラリンピックの垣根を越えた活動が展開されていくと、とても面白いと思います。

パラリンピックを盛り上げることも目標の1つですが、その先には、どのように共生社会を実現するかという課題があります。例えば、日本では、欧米に比べて、街中で車いすの人を見かけることが少ないと感じます。障がいを持つ子どもを育てている私の友人は、「外に出るのが恥ずかしいと感じてしまう」と言っていました。インフラの問題だけでなく、やはり心のバリアがあるのだと思います。また、ある車いすのパラリンピアンは、スロープをつくってもらったり、誰かに「手伝いましょうか」と声をかけてもらうことは、その何百倍もうれしいそうなのですが、実際に声をかけてくれるのは、外国人ばかりだそうです。日本人はシャイな人が多いのかもしれないませんが、東京でのパラリンピックを機会として、障がい者が何を求めているのか学ん

でほしいです。

障がいを持つ子どもと母親が普通に街を歩けるような、誰もが障がい者に「手伝いましょうか」と声をかけられるような社会を2020年の先を目指したいと思っています。

## 東京大会のレガシー形成に向けて

久保田 東京オリンピック・パラリンピックの開催は、東日本大震災からの復興を遂げた姿を世界に示すとともに、日本の魅力をアピールする絶好の機会です。さらに、2020年以降、日本の経済・社会をさらに発展させていく重要な契機でもあります。こうした観点から、東京大会のレガシー形成は大きなテーマとなっており、大会組織委員会は「アクション&レガシープラン」を策定しています。まず、組織委員会のアスリート委員長として、プランの策定に参画された高橋さんよりお話しいただきます。

### アスリート自らがアクションを起こす

高橋 私たちアスリート委員会が強く思っ

ていることは、誰かに何かをしてほしいということではなく、自分たちに何ができるかということです。自分でアクションを起こしたいと思っ

### 使いやすさと「かつこよさ」を兼ね備えたレガシー

ていることは、誰かに何かをしてほしいということではなく、自分たちに何ができるかということです。自分でアクションを起こしたいと思っ

ていることは、誰かに何かをしてほしいということではなく、自分たちに何ができるかということです。自分でアクションを起こしたいと思っ

ていることは、誰かに何かをしてほしいということではなく、自分たちに何ができるかということです。自分でアクションを起こしたいと思っ

ていることは、誰かに何かをしてほしいということではなく、自分たちに何ができるかということです。自分でアクションを起こしたいと思っ

障がいのあるなしにかかわらずスポーツができるような環境にしたいと思っています。そのため

ハード面では、使いやすさだけでなく、「かつこよさ」を兼ね備えたものをつくってほしいと思います。リオ大会のフラッグハンドオーバーセレモニーは、日本のかつこよさが、非常によく表現されていたと思います。福祉的な目線だけでなく、かつこよさにもこだわりたいというのが、私たち障がい者の本音です。

例えば、自動車メーカーの方から、「障がい者のための福祉車両を開発したからぜひ使ってほしい」と言われます。とてもありがたい提案ですし、重要なことです。これに対して「私の夢は、自動運転のオープンカーで、隣に女性を乗せて、湘南の海岸線を走ることです」と、私の思いを自動車メーカーの方に端的にお話しすることがあります。かつこよさは大事なのです。

誰もが考える夢みたいなものに、障がいのあるなしは実は関係ないのです。想像力や発想力に違いはないと思います。2020年が、皆さんが持っている先入観、心のなかにある

久保田 アスリート委員会の副委員長であり、

者にも出会えて、子どもからお年寄りまで、

壁を壊し、自然に溶けてしまっかけとなるように、いろいろなアクションを起こしていきたいと考えています。

久保田 室伏さん、いかがですか。

### 物質的な豊かさから精神的な豊かさへ

室伏 日本が高度成長期にあった1964年のオリンピックは、ハード面でさまざまなレガシーを残してくれました。成熟社会に向かう2020年のオリンピックは、精神面のレガシー、無形のレガシーを残さなくてはいいないと思っています。

河合さんがお話をされたりオ大会のフラッグハンドオーバーセレモニーを見た時、次世代の声が聞こえてくる気がしました。4年後、その先の日本の姿をイメージして、物質的な豊かさを実現した日本は、精神面の豊かさを求めるのだと感じました。素晴らしいプレゼンテーションだったと思います。

日本は、歴史的に、時代の節目で大きな変革があり、そのたびに成長してきました。1964年に続いて、2020年は、そうした歴史の節目になるのではないのでしょうか。4年後を本当に楽しみにしています。

久保田 長榮委員長、2020年東京大会のレガシー形成に向けて、取り組みや考えなどを聞かせてください。

### 「クールジャパン」を世界に向けて発信するチャンス

長榮 私は、「クールジャパン官民連携推進プラットフォーム」の共同会長として、官民が連携してクールジャパンを世界に発信していくことにも取り組んでいます。アニメ・漫画などのコンテンツ産業と、製造業や観光業、ベンチャー企業などが集まってマッチングに取り組み、そこから何か新しいアイデアが生まれるのではないかと期待しています。

2020年までは、世界からの注目がおのずと集まり、クールジャパン戦略を世界に普及させる好機です。地方からの発信を含め、日本の素晴らしさ、魅力を世界の方々にアピールしていきたい。そして、東京オリンピック・パラリンピック開催後も、海外からのお客様を引きつけ続ける日本にしていきたいと思っています。

久保田 最後に、オリンピック・パラリンピック等経済界協議会の会長でもある豊田委員長よりお願いいたします。

### 誇りの持てる日本を次世代に残したい

豊田 1964年の東京大会が私たちの世代に残してくれたものは、本当に大きかったと思います。それから約50年を経て2020年を迎えます。私は、この2020年を、2070年に向けて国のモデルチェンジをする良い機会だと思っています。

今までの50年は、誰かが走ってきた道を追いかければよかった。しかし、今の日本に求められているのは、誰も走ったことのない道をつくっていくことです。今日、皆さんのお話を伺って、そういうレガシーを残していくことが、オリンピック関係者のみならず、国民皆がやるべきことなのではないでしょうか。私たちの心の面でも、国の体質や価値観の面でも、一歩大人になる良いチャンスです。誇りの持てる日本を、未来の子どもたちに渡さなければいけないと決意を新たにしました。

久保田 東京大会成功に向けたスタートとして、広く深いお話をいただきました。ありがとうございました。

(2016年10月6日 経団連会館にて)